

湯どうふ

泉鏡花作

大正十三年二月

昨夜は夜ふかしをした。

今朝・・・と云ふがお午ごろ、炬燵でうと／＼して居ると、いつも来て囀る、おてんばや、いたづらツ兒の雀たちは、何處へすツ飛んだか、ひつそりと静まつて、チイ／＼と、甘えるやうに、寂しさに、一羽目白鳥が鳴いた。

いまが花の頃の、裏邸の枇杷の樹かと思ふが、もつと近い。屋根には居まい。ぢき背戸の小さな椿の樹らしいなど、そつと縁側へ出て立つと、その枇杷の方から、斜にさつと音がして時雨が来た。

椿の梢には、つい此のあひだ枯萩の杖を刈つて、その時引残した朝顔の蔓に、五つ六つ白い實のついたのが、冷く、はら／＼と濡れて行く。

考へても見たが可い。風流人だと、鶯を覗くにも行儀があらう。それ鳴いた、障子を明けたのでは、

めじろが熟として居よう筈がない。透かしても、何處にもその姿は見えないで、濃い黄に染まつた銀杏の葉が、一枚ひら／＼と飛ぶのが見えた。
懐手して、肩が寒い。

かうした日は、これから霽にも、雪にも、いつもいゝものは湯豆腐だ。――昔からものゝ本にも、人の口にも、音に響いたものである。が、……此の味は、中年からでないと分らない。誰方の兒たちでも、小兒で此が好きだと言ふのは餘りなからう。十四五ぐらゐの少年で、僕は湯どうぶが可いよ、なぞは――説明に及ばず――親たちの注意を要する。今日のお菜は豆腐と云へば、二十時分のまづい顔は當然と言つて可い。

能樂師、松本金太郎叔父てきは、湯どうぶはもとより、何うした豆腐も大のすきで、従つて家中が皆嗜んだ。その叔父は十年ばかり前、七十一で故人になつたが、尚ほその以前……米が兩に六升でさへ、世の中が騒がしいと言つた、諸物價の安い時、月末、豆腐屋の拂が七圓を越した。……どう

も平民は、すぐに勘定にこだはるやうでお恥かしい
けれども、何事も此の方が早分りがする。……
豆府一挺の値が、五厘から八厘、一錢、乃至二錢の
頃の事である。……食つたな！ 何う
も。……豆府屋の通帳のあるのは、恐らく松
本の家ばかりだらうと言つたものである。いまの長
もよく退治る。ーお銚子なら、まだしもだが、催、
稽古なんど忙しい時だと、ビールで湯どうふで、見
る／＼うちに三挺ぐらゐるりと平らげる。當家の
は、鍋へ、そのまゝ箸を入れるのではない。ぶつ／
＼と言ふやつを、椀に装出して、猪口のしたちで行
る。何十年來馴れたもので、つゆ加減も至極だが、
しかし、その小兒たちは、皆知らん顔をしてお魚で
居る。勿論、そのお父さんも、二十時代には、右同
斷だつたのは言ふまでもない。

紅葉先生も、はじめは「豆府と言文一致は大嫌
だ。」と揚言なすつたものである。まだ我樂多文庫
の發刊に成らない以前と思ふ……。大學へ通は
るゝのに、飯田町の下宿においでの際、下宿の女房

さんが豆腐屋を、とうふ屋さんと呼び込む。小さな下宿でよく聞える。一、聲がすると、「媪さん、又豆腐か。そいつを食はせると斬つ了ふぞ。」で、豫てこのみの長船の鞆を拂つて、階子段の上を踏鳴らしたと。・。・。御自分ではなさかなかつたが、當時のお友だちもよく話すし、おとしよりたちも然う言つて苦笑をされたものである。身體が弱くおなりに成つてからは、「湯豆腐の事だ。・。・。古人は偉い。いゝものを拵へて置いてくれたよ。」と、然うであつた。

あゝ、命日は十月三十日、・。・。その十四五日前であつたと思ふ。・。・。お二階の病床を、久しぶりで、下階の八畳の縁さきで、風冷かな秋晴に、湯どうふを召がりながら、「おい、そこいらに蓑蟲が居るだらう。・。・。見な。」「はッ。」と言つた昨夜のお夜伽から續いて傍に居た、私は、いきなり、庭へ飛出したが、一寸廣い庭だし、樹もいろ／＼ある。葉もまだ落ちない。形は何處か、影も見えない。豫て氣短なのは知つて居る。特に御病氣。何かのお慰に成らうものを、早く、と思ふが見

當らない。蓑蟲戀しく途に迷つた。「其處に居る、……其の百日紅の左の枝だ。」上野の東照宮の石段から、不忍の池を遙に、大學の大時計の針が分明に見えた瞳である。かゝる時にも鋭かつた。

睫毛ばかりに附着いて、小さな枯葉をかぶりながら、あの蓑蟲は掛つて居た。そつとつまんで、葉をそのまゝ、ごそりと掌に据ゑて行くと、箸を片手に、おもやせたのが御覽なすつて、「ゆうべは夜中から、よく鳴いて居たよーちゝ、ちゝーと……秋は寂しいなーよし。其方へやつときな。……殺すなよ。」小栗も傍から手をついて差覗いた。「はい、葉の上へ乗せて置きます。」軽く頷いて、先生が、「お前たち、銚子をかへな。」……ちゝ、ちゝ、はゝのなきあとに、ひとへにたのみ參らする、その先生の御壽命が。……玄關番から私には幼馴染と云つてもいゝ柿の木の下したの飛石とびいしづたひに、うしろ向きに、袖はそのまゝ、蓑蟲の蓑の思おもひがしたのであつた。

たゞし、その頃は、まだ湯豆腐の味は分らなかつた。眞北には、此の湯豆腐、たのしみ鍋、あをやぎなど、言ふ名物があり、名所がある。辰巳の方には、ばか鍋、蛤鍋など、言ふ逸物、一類があると聞く。が、一向に場所も方角も分らない。内證でその道の達人にたゞすと、曰く、鍋で一杯やるくらゐの餘裕があれば、土手を大門とやらへ引返す。第一歸りはしない、と言つた。格言ださうである。皆若かつた。いづれも二十代の事だから、湯豆腐で腹はくちく成らぬ。餅の大切なだるま汁粉、それも一ぜん、おかはりなし。．．．然らざれば、かけ一杯で、蕎麥湯をだぶ／＼とお代りをするのださうであつた。

洒落れた湯豆腐にも可哀なのがある。私の知りあひに、御旅館とは表看板、實は安下宿に居るのがあるが、秋のながあめ、陽氣は悪し、いやな病氣が流行ると言ふのに、膳に小鯛の焼いたのや、生のまゝの豆腐をつける。．．．そんな不料簡なのは冷やつことは言はせない、生の豆腐だ。見てもふるへ上るのだが、食はずには居られない。ブリキの鐵瓶に入れて、ゴトリ／＼と煮て、いや、うで、そつ

と醬油しただでなく、つしに舐なめると言いふ。――恚かう成なつては、湯豆腐ゆどうふも慘憺さんたんたるものである。

・ などと言いふ、私わたしだつて、湯豆腐ゆどうふを本式ほんしきに味あじひ得うる意氣いきなのではない。一體たい、これには、きざみ葱ねぎ、たうがらし、大根だいこんおろしと言いふ、前裁せんざいのつはものゝ立派りっぱな加勢かせいが要いるのだけれど、どれも生なまだから私わたしはこまる。 その上うへ、式かたの如ごとく、だし昆布こんぶを鍋なべの底そこへ敷しいたのでは、火ひを強つよくしても、何どうも煮にえがおそい。ともすると、ちよろ／＼、ちよろ／＼と草くさの清水しみづが湧わくやうだから、豆腐とうふを下したへ、あたまから昆布こんぶを被かぶせる。即すなはち、ぐら／＼と煮にえて、蝦夷えぞの雪ゆきが板昆布いたこんぶをかぶつて踊をどりを踊をどるやうな處ところを、ひよいと鉄はさんで、はねを飛とばして、あつゝと慌あわてゝ、ふつと吹ふいて、するりと頬張ほくばる。人ひとが見みたらをかしからうし、お聞ききになつても馬鹿ばか々々しい。が、身みがつてゝはない。味あじはとにかく、ものゝ生なまぬるいよりは此この方が増ましだ。

時々ときどき、婦人ふじんの雑誌ざっしの、お料理方れうりかたを覗のぞくと、然しかるべき研究けんきうもして、その道みちでは、一端ぱし、慢まんらしいのゝ投とう

書がある。たとへば、豚の肉を細くたゝいて、搥鉢
であたつて、しゃくしで搦つて、掌へのせて、だん
どにまるめて、うどん粉をなすつてそれから捏ね
て・・・あゝ、待つて下さい、もし／＼・・・
・その手は洗つてありますか、爪はのびて居ませ
んか、爪のあかはありませんか、とひもじい腹でも
言ひたく成る、のが澤山ある。

浅草の一女として、ー内ぢやあ、うどんの玉を
かつて、油揚と葱を刻んで、一所にぐら／＼煮て、
ふツ／＼とふいて食べます、あついでいゝので
す。ー何を隠さう、私は此には岡惚をした。

いや、色氣どころか、ほんたうに北山だ。・・・
・湯どうふだ。が、家内の財布じりに當つて見て、
安直な鯛があれば、・・・鮐鮓でもいゝ、・・・
・・・希くは菽乳羹にしたい。

しぐれは、いまのまに歇んで、薄日がさす・・・
・楓の小枝に残つた、五葉ばかり、もみぢのぬれ
色は美しい。こぼれて散るのは惜い。手を伸ばせば、
狭い庭で、すぐ届く。

本箱をさがして、紫のおん姉君の、第七帖を出す
のも仰々しからう。・ ・ ・ 炬燵をこたつすべ
さうな、膝栗毛の續、木曾街道の寢覺のあたりに、
一寸はさんで。・ ・ ・